

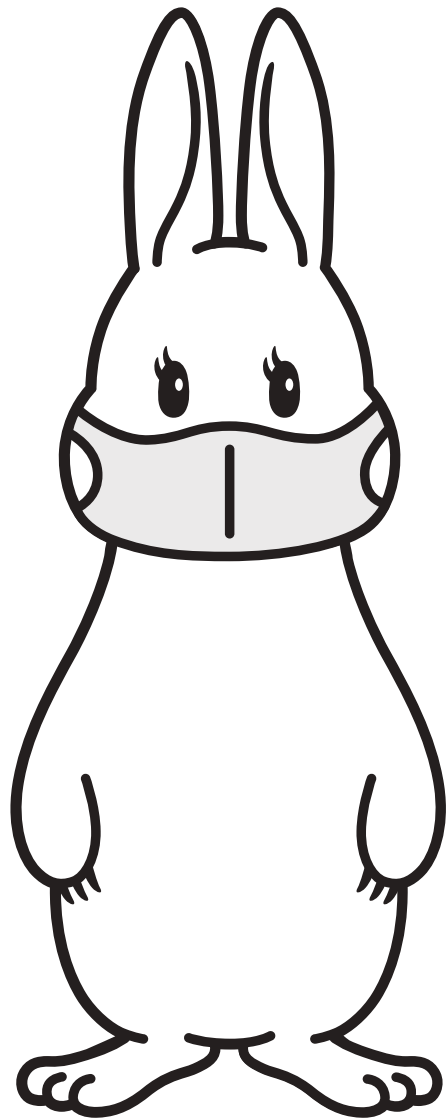
CarroMag.

Tのポーズで
ディスタンス!



ワークシヨップ・レポート
コロナ禍の
夏休み子ども
ワークシヨップ 2020

『キャロマグ』ってなに？



三軒茶屋のキャロットタワーにある世田谷パブリックシアターには、ちょっとややこしいのですが、組織名と同じ「世田谷パブリックシアター」（600席）と「シアタートラム」（200席）という2つの劇場があり、年間を通じていろいろな演劇やダンスの作品を上演しています。ですが、世田谷パブリックシアターの活動はこうした劇場での上演活動に留まりません！

3つある稽古場や、セミナールーム、世田谷区内の小中学校や児童館、高齢者施設などで、小学生からお年寄りの方まで、ありとあらゆる方たちが参加できるレクチャーや演劇ワークショップを行っています。キャロマグは、そんな世田谷パブリックシアターの、通常目に留まることの少ないこうした活動を不定期で紹介する冊子です。オレンジ色のキャロットタワーにある劇場の冊子だから、キャロットマガジン。それを短くしてキャロマグ（CarroMag）。ご案内をつとめるのは、うさぎのキャロちゃんです。一気にいろいろご紹介はできませんけれど、これをお読みのみなさんに、少しずつ世田谷パブリックシアターの活動を知って頂きたいと思っています。もし、ちょっとでもご興味をもって頂けるような内容がありましたら、今度はぜひ参加しにいらしてくださいね。



バックナンバーはこちらからお読みいただけます。

<https://setagaya-pt.jp>（「ワークショップ・レクチャー」から「出版物ほか」にお進みください）

CarroMag.

Vol.17 | Dec.2020

CONTENTS

ワークショップ・レポート

コロナ禍の 夏休み子ども ワークショップ2020

はじめに 2

変わり続ける日常生活の中で、
劇場が変わらずに守り続けるもの
世田谷パブリックシアター

進行役座談会 4

コロナ禍でのワークショップの作り方

青山公美嘉（NPO法人演劇百貨店）、柏木陽（NPO法人演劇百貨店／演劇家）、
すずきこーた（演劇デザインギルド）、富永圭一（abofa）、とみやまあゆみ（NPO法人演劇百貨店）

夏休み子どもワークショップ2020 全記録

『小学生のためのえんげきワークショップ』 12

『中学生のための演劇ワークショップ』 25

『高校生のための演劇ワークショップ』 28

コロナ渦でおすすめのシアターゲーム！ 30

CarroMag. Information

近日開催予定の主なイベント・ワークショップ 32

学芸スタッフから

おまけマンガ『たまにはこんな役 #17』

編集後記

変わり続ける日常生活の中で、 劇場が変わらずに 守り続けるもの

世田谷パブリックシアター

コロナ禍でのワークショップ自粛、 そして再開まで

今回の『キャロマガ』で特集するのは、2020年夏、コロナ禍で開催した「夏休み子どもワークショップ」です。このワークショップ（以下、WS）は1998年の開始以来、毎年、小学生から高校生までを対象に実施し、たくさん子どもたちと、あーでもない、こーでもないと言いながら演劇作りに取り組んできました。

しかし、2020年の冬から始まった新型コロナウイルス感染症の世界的流行により、様々な状況が一変しました。世田谷パブリックシアターにおいては、2020年2月26日の政府によるイベント自粛要請をきっかけに、数々の舞台公演やワークショップが中止となりました。3月31日には臨時閉館となり、4月7日の緊急事態宣言発令を受け、劇場スタッフも在宅勤務となりました。決まっていたすべての企画が中止となり、先がまったく見通せないなかで、私たち劇場スタッフは、演劇WSのあり方を模索する日々を過ごすことになりました。

5月に入ると、オンラインでの演劇WSを実施する団体や劇場も増えていき、様々な実践例を参考にしながら、公共劇場としてどのようなかたちでWSを再開するのがよいか話し合いを重ねました。

その際、記憶に蘇ったのが、東日本大震災の11日後となる2011年3月22日に開催したWSでした。当時、絶え間なく続く余震や放射線被ばくへの恐れ、メディアが伝える被災地の状況に対する不安や心配等で、多くの人が発散できないモヤモヤを抱えていました。そんな中でのWSは、人と会い、話し、考え、身体を動かし、声をだすという、演劇を作る上で避けては通れない、人と人の関わりの必要性を痛感するものになりました。

今回、コロナによる社会的混乱と変わり続ける日常生活の中で、私たち劇場が変わらずに守り続けたいのは「人」と関わり、「人」を理解し、「人」と何かを創り、「人が集まる場」をひらき続けるということでした。この思いを私たち学芸スタッフと進行役とで改めて共有し、在



宅勤務が明けた直後の6月17日から事業を再開させ、試行錯誤をしながら8月の「夏休み子どもワークショップ」までたどり着くことになりました。

「今」だからこそできた 演劇ワークショップのかたち

例年、夏休みの子どもWSは、1コース定員20名程度とし、小学生低学年（2コース）、高学年、中学生、高校生（各1コース）を対象を分けて、1コース5～7時間×3日間のWSを開催してきました。しかしコロナ禍でのWSは、劇場で設けている感染症対策のガイドライン（手洗い、うがい、手指の消毒、検温、マスク、ごみの処理、換気、距離をとる、物品の除菌など）を遵守しなくてはならず、もちろん例年通りとはいきません。そこで、安全な環境作りと参加の機会の担保のため、各コース定員10名程度にしぼり、小学生低学年（6コース）、中学年（4コース）、高学年（2コース）、中学生（3コース）、高校生（2コース）の各17コースに

対象を分けて、1.5～2時間×3日間のWSを設定することにしました。

今回の「夏休み子どもワークショップ」を企画運営する上で、私たち学芸スタッフと進行役が第一に取り組んだのは、「できない理由」が多くある中で、どれだけ「実現するための方法」を探せるか、ということでした。そして、挑戦と失敗を繰り返しつつ、こんな困難な状況でも多くの「できること」があることに気づきました。それは、一度立ち止まり、状況を考察する中で見えてきた、「今」だからこそできた演劇ワークショップのかたちであり、「人が集う広場」としての劇場の「今」のあり方だったように思えます。

急激に変化する社会の中で、私たちは多くのものを失いました。しかし、失った場所から一歩踏み出してみると、新たな発見と可能性があるはずです。こういった可能性を一つずつ拾い上げながら、広場をひらき続ける取り組みを記録したのが今回の『キャロマガ』です。

（文責・塩原）



富永圭一 (abofa)

ワークショップグループ「abofa」主宰。開館前から世田谷パブリックシアターのワークショップに進行役として関わり、現在、同劇場の契約ファシリテーター。他の公共劇場でのワークショップも多数。

とみやまあゆみ (NPO法人演劇百貨店)

俳優。ワークショップファシリテーター。桜美林大学総合文化学群演劇専修卒業。舞台を中心とした俳優活動と並行して、小・中学校や劇場などで子どもから大人まで様々な人たちを対象とした演劇ワークショップを行なう。「NPO法人演劇百貨店」メンバー。



コロナ禍でのワークショップの作り方

いつもとは違う夏になった2020年。

感染症に気をつけながら、進行役たちはどのように

「子どもワークショップ」を行なったのか、聞いてみました！

聞き手：九谷倫恵子 (世田谷パブリックシアター)



柏木陽 (NPO法人演劇百貨店／演劇家)

1993年、演劇集団「NOISE」に参加し、演出家・劇作家の故・如月小春とともに活動。2003年に「NPO法人演劇百貨店」を設立し、全国各地で子どもたちとともに独自の演劇空間を作り出している。世田谷パブリックシアターでは、「かなりゴキゲンなワークショップ巡回団」「地域の物語」などを進行している。

青山公美嘉 (NPO法人演劇百貨店)

桐朋学園大学短期学部芸術科演劇専攻にて演劇を学ぶ。1999年に渡英し大道芸人として活動。帰国後、「NPO法人演劇百貨店」のワークショップに進行役として参加。老若男女問わず愛される親しみやすいキャラクターで、各地のワークショップで活躍している。

すずきこーた (演劇デザインギルド)

俳優、ワークショップファシリテーター。劇場や教育現場での演劇創作の他、在日外国人との演劇創作、日常や社会の問題を演劇で考えるフォーラムシアターを作るなど、多岐にわたり活動中。現在、目白大学非常勤講師。世田谷パブリックシアターでは「地域の物語」「小学生のためのワークショップ」などを進行。



コロナ禍でのワークショップ

九谷 2020年の「夏休み子どもワークショップ」を担当された5人の進行役のみなさんにお集まりいただきました。前号(16号)のキャラマガ「夏休み子どもワークショップ2019」の座談会でもお集りいただいた方々ですね。感染症の世界的な流行で、去年とは状況が様変わりしました。今日は、コロナ禍でのWSという視点で、みなさんにお話をさせていただければと思っています。まずご担当されたWSをどう企画したのかや内容についてお聞かせください。

柏木 僕が担当したのは、小学生低学年Bコース(p.13)と高校生Bコース(p.29)です。今回、小学生低学年は「夏」をテーマにして、「花火」とか「盆踊り」といったモチーフに動きを付けたりしました。このモチーフを選んだのは今の状況ならではの目論見がありました。「花火」は遠ざかっていく動きだし、「盆踊り」は人と接触しないで踊るものですから。高校生のほうは、「対立と葛藤」というテーマでシーン作りをしました。「対立と葛藤」なら、離れたくなるようなシーンが生まれることになるだろうと。様々な選択肢がある中で、「離れる」モチーフを最終的に選ぶ判断をしました。

すずき 僕が担当した小学生低学年Cコース(p.14)では、段ボール箱を2つ重ねた山を作り、その山を装飾しながら山の物語を考え、演劇にしていきました。装飾をする際は、1チーム4名程の3チームに分かれ、まず各チームのうち2人が装飾し、残りの2人はそれを見ながら自分はどう装飾するかを考える、それを交代でやりました。今回のWSでは、他の人の作業を受け入れて、そこに自分の作業をプ

ラスしていくということをやりたと思っていたのですが、コロナのことがあるので、話し合っというよりも、お互いの作業を見ながら暗黙のうちに対話するみたいなことがいだろうと思ひ、こういかたちになりました。小学生中学年Iコース(p.20)は、最終日が俳句の日(8月19日)だったので、子どもたちに俳句を作ってもらひ、それをストップモーションで表現し、その前後に動きを加えて劇にすることをやりました。子どもたちが作った俳句は「夏休み プールにいつて 泳ぎたい」とか、「ゲームして そのあと暇だなにしよう」とか、「お盆の日 家で迎える不思議な年」みたいな、今年の夏休みならではのものが出来てきて、子どもたちが今、何を感じ、思っているのかを掬ひあげることができたかなって思っています。

青山 私は小学生低学年Dコース(p.15)と高学年Lコース(p.23)を担当しました。低学年はものすごく穏やかな雰囲気スタートし、「たるえだ」とか「だるまさんがころんだ」とか、ふだんやっているゲームにコロナの仕様を入れ込む感じでやりました。みんな大喜びでした。身体を動かした後は、コロナでみんな行きたいところに行けてないだろうなと思ひ、ダンボールで島を作って、そこに行きたい場所を書いて冒険するってい

うことをやりました。高学年のほうは、用意しておいた雑誌から好きなイメージを切り抜いてもらって1枚のカラージュを作り、それをくじ引きで当たった人のカラージュと重ね合わせて本の表



紙を作り、その本の物語のワンシーンを考えるということをやりました。

とみやま 私は小学生低学年Eコース (p.16) と中学生Aコース (p.25) を担当しました。小学生は、「真夏の王国物語」をテーマに劇を考えたのですが、コロナのことがあるので個人作業の時間を作ろうと思って、2日目に衣装を作りました。衣装作りでは自分たちのアイディアを元に、集中してどんどん手を動かしていて、みんなとても落ち着いている印象でした。

中学生のほうは、「違和感をおぼえること」をテーマに意見を出し合って劇を作りました。自分や友人の悪口を言う、授業に真面目に取り組まない、といった同級生の態度に対するもやもやが多く出ましたね。

富永 僕は小学生低学年Aコース (p.12) を担当しました。小学生低学年って距離を保つのが難しい年齢だと思うのですが、大人が「他の子に近づいちゃダメ」と言うので、初日、子どもたち自身に距離を保つためのルールを作ってもらいました。ただ、いくらルール作りを子どもに任せても、結局、規制があることには変わりはないんですよね。それに、どんな言い方にしても語気が荒くなることが分かり、どうしようかなと自分が考えているうちに時間が経ってしまいました。考え方の入口がよくなかったと思っています。過剰にコロナを気にしてしまいました。ふだん学校に行ってWSをやるときは、「怪我をし

て歩けない子がいます」とか「多動症の子がいます」とか事前に聞いても、まずは子どもたちに会ってみてやれることを探すぐらいの感じなので、コロナの場合もそんなふうに入れたらよかったです。初日に反省をし、2日目からはシアターゲームをやったり、『ももたろう』で演劇を作ったりしました。

いつもと違う状況下での発見・問い

九谷 密になるのを避けないといけなかったり、マスクを着けていたり、いつもと違う条件の中でのWSとなりました。そのことでの変化はどんなものでしたか？

青山 やっぱグループ作業は難しく、2人組の作業が長くなっちゃったかな。

柏木 僕も2、3人で進めてもらうことが多かったですね。

九谷 ふだんは2人組でシーンを作るのってあまりやらないですね。

とみやま 2人組にするとチーム数が増えてバリエーションが生まれるなって思いました。あと参加者が10人で、いつものように5、6人でチームを組むと2チームにしかならないので、子どもたちが相手チームと優劣を感じてしまいそうで、怖いですね。私はいつもより個人作業の時間が多めだったと思うんですけど、絶えずグループ作業は入っていました。距離を取ることで相談しづらいんだけど、相談するっていう作業はなにかを乗り越えさせると改めて思いましたね。

すずき そうですね。僕は今こそグループ作業

をしなくてはダメなんじゃないかなって思って。久しぶりにグループダイナミクスって言葉についてきちんと考えました。グループで何かをしていくときに生まれる力ってあるよね。よく学校の先生から、コロナがあるために集団活動やクラス作りができていないという話を聞くので、自分の意見を言って人の意見を受け止めるということをやったほうがいいと思いました。

九谷 今まででは当たり前のようにグループ活動をやっていたけど、できないとなったときに改めてその価値が感じられましたよね。

すずき 社会が非接触を求め、出会ったり、相談することをオンラインでやるようになってくると、直接人と会って何か一緒に作業をしようとするのに抵抗を感じたり、怖くなってくるってことがあると思います。放っておくとどんどん怖くなるから、今やっておかないといけないってすごく思います。

とみやま 私が担当した両コースの子どもたちからは、お互い関係をとることに気おくれしているような感じを受けました。マスクを着けて初めて会う人たちとどうやって関わるのかという戸惑いが、私も含めてあったと思います。WSの時間が短かったというのも大きいと思うんだけど、3日間やってみて全員と演劇を作るというよりは、私対個人という印象のまま終わった感じも大きかったかな。

柏木 僕のコースでも、参加者同士が仲良くなるっていうのが難しく、ちょっとずつといった感じになった。年齢が低い子のほうが距離を取るのが難しいので工夫しないといけないことが多くて、高校生くらいになると「離れて」とはそんなに言わなくてよかった。だけど、逆に仲良くなるのが難しいですね。

すずき 仲が悪いわけじゃないんですが、いつもより子どもたち同士が仲良くなりきれなかったかなっていう印象は確かにありました。

柏木 人と人とが近づけないことによって間柄がなかなか縮まらないのは、コロナならではのですね。

富永 今回、積極的に参加しない子がいて、ふだんそういう子がいたら、その子が話すトーンと同じトーンで話しかけるみたいなことをやっているんだけど、そうすると近づいて話すことになってしまうので、この手は使えないということに気がつきましたね。また、ふだんは子どもたちの表情を見て進行や言葉を変えているんですけど、今回はマスクを着けていてそれができないなと。ひと言ずつWSの感想を言う時間に、子どもが発言しないことがよくありますよね。

今回もあったんですが、言葉が出てくるまで待つべきなのか、待つのはその子にとってプレッシャーが大きすぎるのか、表情が見えないことで判断がつかず、いつもよりも待つ時間を短くして終わらせてしまったなと思います。

とみやま それは私もありました。参加しづらそうな子たちに対して親密な距離感で話してみることで乗り越えられていたことができなかったなって。あと、今までは無言でも表情だけでやりとりできていたんだということに、マスクを着けていることで気づきました。それは参加者の子ども同士でも同じことがいえると思います。

九谷 以前はお昼ごはんも一緒に食べて5、6時間やっていましたが、今回はWSの時間が1時間半から2時間の3日間に短縮されました。それについてはどうでしたか？

富永 この状況なので仕方がないんですけど、けっこう難しいなって思いましたね。特に低学年ってふだん「〇〇をしてはいけません」って言われている子が多いんじゃないかと思い、稽古場ではやりたいことをやらせてあげたかった。悪ふざけも含めてね。でも悪ふざけって発展性がないから飽きるのよ。そのときに子どもたちが自分で面白いことを見つけていけるようにしたかったんだけど、そこに至るまでの時間もコミュニケーションも足りなかったです。

青山 時間が短くてよかったなということもあって。小学生の低学年コースで、ダンボールの島に迷路を作った子が「ゴール」をひらがなで「ごーる」って書いたんだけど、それを見て他の子が「ふつうはカタカナじゃない？」って。少しぎくしゃくしたんだけど、この島ではひらがなが正しいのだっていうことにして。あれが1日、2日、3日間と長い時間積み重なると喧嘩になるだろう

など。1日1時間半で3日だったから、みんなで頑張ろうねってなったような気はしたかな。

すずき でもさ、喧嘩をする機会を奪っているっていう気がしたの。時間が短いから仲がよいままで終われちゃう。別に喧嘩をわざわざする必要はないんだけど……。

とみやま 私は、もちろん長いWSも大事だけど、短いWSもすごくいいなと思いました。まず参加しやすいですし、短いといっても3日間あるので、プログラムを発展させる時間があることで少し踏み込んだ場をもてるなど。また従来のWSの時間について、実は毎年、参加者の疲労感が気になっていて。初めて来る場所で、初めて会う人たちと、初めてのことに取り組むというのは大人でも疲れることだと思いますが、子どもたちにとってはなおさらではないかと。もちろん、疲れないように配慮することが先行しすぎてしまうと、出会うことや協働の可能性を狭めることになってしまう危険もあると思うのですが。長時間のWSと同時に短い時間のWSも選択肢として手渡してあげられるとよいなと思いました。

コロナ禍から考えるこれからのこと

九谷 最後に、まだコロナの流行が収まらない中ではありますが、コロナ禍が自分自身に残したもの、今後やりたいことなどがあれば教えてください。

柏木 僕はとてもゆっくりな人間なので、自分の中に見えてくるまでに時間がかかりそう。ただ、緊急事態宣言が開けて仕事が再開し、いろいろな現場で楽



しやしんどさを強く感じるようになったの。これはコロナ以前にはなかった。自粛期間中に時間がたくさんあったからか、俺、あと20年くらいか考えるわけ。どう仕事をしていくべきか。新しいことというよりは、今、目の前にあるものにチャレンジしながらも、自分がどうしていくのか問い直していくことになるのかなという予感がしています。

富永 僕が思うのは、今僕たちはアジアで流行ったものが1週間で欧州・全米に広がる時代に生きているわけよね。そうすると、このままってこともあるんじゃないかって。コロナが解決しても、また新しいウィルスが出てきそうだって。このままアルコール消毒とマスクが必須になることを想像してしまう。であれば、今、僕たちが10人前後の人たちに対してやっていることは、世の中的には「不要不急のもの」か



もしれないんだけど、そうではないんだということ伝えるにはどうすればいいのか。目の前で行なわれる誰かの表現を見るとか、耳を傾けるとか、同じ空気を共有するとか、どう伝えればそれが必要不可欠なものだと認識され、「それはやってください」って世の中の人が思ってくれるようになるのか。それをみんなで考えたって思っています。

すずき 今の状況がこのまずっと続く可能性を考えれば、僕たちは注意をしていないと落とし穴に落ちてしまう気がする。つまり、人と人が初めて出会って、その場にいる人みんなで何か一つのことに取り組むってことはとても時間がかかることなんですよ。だけど今回のように、1時間半でWSを、となると、それはそれできちゃうわけです。僕らはどんどん進行するのがうまくなっていて、効率的にWSを組み立ててしまう。それはものすごく危ないことなんじゃないかって思う。効率のよいWSは選択の一つとしてありだと思うけれど、このままの状況が続くと、そればかりになってしまう気がする。

とみやま 効率的なWSの危うさというのは、具体的にどんなところ？

すずき たとえば、「こーたが嫌いだから言うことは聞かない」って言って、机の下に入って出てこない子は最近いないわけです。いてほしくはないよ。だけど、そうしたら「どうして嫌いなのか」とか「どうしたらいいかな」みたいことを話すことができる。でも僕たちは進行がうまくなっていて、失敗はしたくないわけだから、そういうことを回避するようにプランニングしているし、進行している。そうして、人の違和感やもやもやみたいなものを打ち消してって

しまっているところがあると思う。もちろんいろいろ手立てをして、参加者が今、何を考えているのか、感じているのかを表現してもらえるようにしているわけだけど、そこからもこぼれ落ちるものを拾っていくのは時間がかかることだから。「うまくいく」ことを意識しすぎるとそういうことをとりこぼしてしまう気がする。そのことについては自覚的であったほうが良いような気がしています。

富永 いまWSでは普通にニックネームで呼び合うけれど、WSというものが今ほど知られていなかった昔は「初対面の人をニックネームで呼ぶなんてできない」とか言われたりして。そこから話し合いを始めるとなかなか進まないし時間もかかるから、当然工夫してなんとかしようとするよね。さらに年月を経るごとに世の中の流れなのかWSの時間は短くなっていき、そのうちに学校でもWSをやるようになり。学校はカリキュラムも時間もきっちり決まっているので、こちらもそれに合わせてきちんと終わらせるってことが必要になり、できるようになってきた。必然的にスムーズな進行を目指す道を歩んできたわけです。ところが今回、すごくギクシャクとした不自由な感覚が久しぶりにありました。コロナを気にしていつものやり方が使えなかったことで、初めてWSを進行しているような気分になり、スムーズな進行ができなかった20年以上前は、頑張っただけでその感覚をなくそうとしていたってことを思い出した。初日はそのギクシャクした感覚がちょっと楽しくなったりもして、構成的なプログラムとかメニューとか、そういったものをとっぱらってしまいました。ただ、僕はよくても、そうすると周りの人に迷惑がかかると思い直し、2日目からは普通にシアターゲームを



取り入れることになりました。多くの人はいまよく進まないことにストレスを感じるものなので、難しいところがあるのが現実だなと思います。

九谷 今回、とても短い時間での実施を余儀なくされたことで、コロナ禍以前にもおそらく傾向としてあったことがより強まったと同時に、可視化されたということなのかもしれませんね。この状況がいつまで続くのか、あるいはこのままなのか分かりませんが、いずれにせよ、構成的で効率的なWSではこぼれ落ちてしまうものをいかにして掬いあげることができるのかということは検討しなければならないのだと思います。私たちはWSでどういう場所を作っていくのか、ということが改めて問われているのかもしれません。

(2020年10月17日収録)

小学生のための えんげきワークショップ

低学年Aコース

進行役：富永圭一 アシスタント：田崎葵、矢部久美子

日程：2020年8月3日（月）～5日（月）10：00～11：30 対象：小学1・2年生 参加者：9名

まず、距離を楽しく保つための約束や仕組みを子どもたち自身で考案することから始めました。その後「夏休みに行きたい場所」を出し合ってその場所でやりたいことを身体でやってみる、「だるまさんがころんだ」で止まる際にいろいろなものの形になるなどの活動を行ないました。最終日には『ももたろう』のお話から「イヌ・サル・キジ以外のももたろうのおとも」と、「鬼と仲良くなるための、鬼が喜びそうなプレゼント」を考え、実際にそれらを紹介する劇を作りました。

コロナ禍でのWS振り返り

進行役：富永圭一

「距離を保ち、飛沫に注意を払わなければならない」、これを厳密に考えると、人に触らず、会話をせず、一定より離れていることしかできない演劇WSになります。そんなWSできるのかな？ できたとして、どこが面白いのだろう？ そもそもそれを演劇WSと呼べるのだろうか？ と思いながらも、私はこれら規制から発想をスタートさせました。しかし、これは間違いだったと身をもって経験しました。演劇は多種多様で、無声劇もあれば、一人芝居もあります。そして演劇は総合芸術です。当然、演劇WSも可能性は無限大ですし、方法論も星の数ほどあるはずです。ファシリテーター一人ひとは、自分が好きだと思う演劇の種を蒔けばいいのです。私はずっとそうやってきたにも拘わらず、規制が入ることで、「やりたいこと」ではなく、「やってはいけないこと」に意識が向きすぎてしまいました。コロナにWSを合わせる必要はないのです。コロナにキチンと向き合えばいいのです。そうすれば、少しずつの変化を経てWSが進化していくはずです。これから世界中のアチコチで新しいタイプの演劇WSが生まれることでしょう。今、生きているということは、それを創ることも、参加することも、目撃することもできるということです。ワクワクしませんか？



低学年Bコース

進行役：柏木陽 アシスタント：大道朋奈、ナントモ

日程：2020年8月7日（金）～9日（日）10：00～11：30 対象：小学1・2年生 参加者：8名

演劇で今年の夏にしたいことを思いきり楽しみました。

1日目は、子どもたちが挙げた「夏のもの」を身体を使って表現し、お互いに当て合いました。

2日目は、全員で曲の歌詞に合わせた振り付けを考えて、オリジナルの盆踊りを作りました。

3日目は、子どもたち自身が動きや形を考えて、割られるスイカになったり、打ち上げ花火になったりしました。

この夏休みにはなかなかできないことをやってみた3日間でした。

コロナ禍でのWS振り返り

進行役：柏木陽

WSのプランニングをする際、「お互いにくっつかないこと」を楽しくやるにはどうしたらいいのかというところから発想しました。また今年の夏を満喫できない子どもたちに「夏」を感じてもらうためのモチーフとして、「花火」「盆踊り」「スイカ割り」を選びました。これらのモチーフを選んだのは、夏らしいという理由からだけではありません。それぞれのモチーフは子どもたちがお互いの距離を取るのにうまく作用すると思ったのです。「花火」は遠ざかっていく運動をします。「盆踊り」は基本的に誰かに触れることはありません。「スイカ割り」は工夫が必要でした。普通にやると、スイカ役と割る人役が近づいてしまいます。ですので、割る人役を大人のアシスタントがやり、周りに割られたいスイカ役として子どもたちがいることにしました。子どもが「割って！」とアシスタントに声をかけ、アシスタントがその子のほうをちゃんと向いて棒を振り下ろすすぐさしたら、丸くなっていたスイカの子はパカッと割れる真似をします。様々な制限の下でも、工夫の仕方やルール決め方でいかようにも遊べることを改めて確認しました。



低学年Cコース

進行役：すずきこーた アシスタント：植松愛、傳田うに

日程：2020年8月11日（火）～13日（木）10:00～11:30 対象：小学1・2年生 参加者：9名

1日目と2日目の前半は、全身を使ってジャンケンをしたり、ものの形や童話のいち場面を身体で表現する活動を行ないました。その後、おうちで描いてきてもらった「大切なものの絵」をダンボールに貼り付けて、お父さんや家族、すみっこぐらし、自転車といった子どもたちの宝物がたくさん隠された山を工作しました。3日目は、その山についての劇を作って発表。すみっこぐらしを探して友だちになったり、山に登ってみつけた自転車で走ってみたいという劇ができあがりました。

コロナ禍でのWS振り返り

進行役：すずきこーた

大前提として気をつけたのは「密にならないこと」です。ですが、私が今回いちばん大切にしたいと思っていたのは、「グループ作業をちゃんと行なう」ことでした。このことは、私がふだんのWSで常にいちばん大事だと思っていることです。コロナ禍で家族や一人の時間が多くなり、オンラインでのコミュニケーションが増えた今だからこそ、「自分の想いを相手に伝え、相手の想いも受け入れる。その上でどうするかをみんなで考える」というグループ作業が特に大事になると考えました。

限られた時間の中で、協働作業の時間をできるだけ増やすために、今年は宿題も出して、1人でできることは家でやり、WSにそれを持ち寄ってもらうことにしました。WSでは一人ずつの大切なものをダンボールに順番に貼るという作業を行ないました。密を避けるために順番に作業することにしたのですが、順に行なうことで、一人ずつが、グループの仲間の大切なものを眺め、受け入れ、そこに自分の大切なものを貼り、客観的に眺めながら、自分の意見を加えるという、丁寧なグループ作業を行なうことにつながったと思います。



低学年Dコース

進行役：青山公美嘉 アシスタント：植松愛、大道朋奈

日程：2020年8月17日（月）～19日（水）10:00～11:30 対象：小学1・2年生 参加者：9名

今年の夏休みは、行きたいところになかなか行けないけれど、みんなで力を合わせれば、どんなところにも行けるし、なんだってできる!!ということで、子どもたちは小さな探検隊となって旅に出かけました。始めに探検するための訓練をみっちりしたら、グループに分かれ、ダンボールを使ってそれぞれの大きな島を作りました。みんなが行きたいところ、やってみたいこと、ワクワクドキドキするようなことを島に描いていきます。島が完成したら、いざ探検! 泳いだり、空を飛んだり、虹の橋を渡ったり……たくさんの冒険の劇ができました。

コロナ禍でのWS振り返り

進行役：青山公美嘉

マスクをして表情もよく分からないなか、始めは緊張気味の子どもたちでしたが、最初に「たるえだ」(p.30)で思いっきり身体を動かすとみんなニコニコ顔になりました。「たるえだ」はみんな一方を向いて同じ場所で動くので、コロナ禍にぴったりのシアターゲームです。勢いづいてどんどん夢中になりますが、マスクを着けて全力で動くのでこまめに休憩を挟みました。マスクで息苦しいけど、それも笑ってしまう様子。

今回はダンボールを島に見立て、その中に「行きたい場所」を描き、探検するWSを考えました。ディスタンスを考慮して大きなダンボールを用意しましたが、描き始めるとどうしてもくっつきそうになってしまいます。あまりに楽しそうに描いているので注意するものなんだが憚られましたが、そこはコロナ禍、ディスタンスを取る合言葉「ていー!」(アルファベットのT。両手をTの字のように水平に広げて距離を取る。表紙のキャラちゃんが行っているポーズ)と声をかけました。子どもたちは、笑いながらいそいそと離れていきました。コロナを意識しすぎずに、近づきすぎたら注意する、というかたちで進めたWSでした。



低学年Eコース

進行役：とみやまあゆみ アシスタント：戈文来、櫻井晋

日程：2020年8月21日（金）～23日（日）10:00～11:30 対象：小学1・2年生 参加者：10名

テーマは「真夏の王国物語」。始めに「夏といえば何？」と聞き、子どもたちが挙げた「花火」「ひまわり」などを身体で表現する活動をしました。その後、物語の舞台となる王国を決める話し合いをし、「お花の王国」に決定したところで1日目が終わりました。2日目は、子どもたち自身がお花の王国の住人となり、様々な装飾を付けたこだわりの衣装を作りました。3日目は、「何かが起こる」「誰かが来る」「楽しくなる」という流れの簡単な筋を考え、衣装に込めたアイデアを活かしながら、グループでお花の王国の演劇を作りあげました。

コロナ禍でのWS振り返り 進行役：とみやまあゆみ

新1年生は学校生活をあまり体験できないまま夏休みに入ってしまったので、子どもたちがどのような状態で劇場に来るのか、いつも以上に想像することを難しく感じていました。

1日目には、WSのいちばん始めに椅子を円形に並べて座っていたので、それを利用し、身体の止まった形で表現する活動を椅子の前でやること、2人で1つの形を表現する際も椅子の前の場所を各々基準とすることなど、きちんと距離が取れる具体的な指示をするようにしました。また2日目は、距離を取って1人で行なえる作業として工作に取り組むことにしました。工作を実際に行なうときは、道具や材料を人との距離が自然に取れる場所に置く、取りに来る順番を決める、誰かが使った道具はその都度消毒するなど、細かく検討して行ないました。



低学年Fコース

進行役：大道朋奈 アシスタント：すずきこーた、ようよう

日程：2020年8月25日（火）～27日（木）10:00～11:30 対象：小学1・2年生 参加者：8名

絵本を題材に劇作りをしました。1日目は、絵本『かあかあもうもう』（丹治匠・作）を読み、からすと牛がユーモラスに鳴き声を競う様子を、からすチームと牛チームに分かれて演じました。2日目は、自分専用のダンボールをお風呂に見立て、箱に入って10秒数えて出てくる「お風呂リレー」をしたのち、絵本『ムニャムニャゆきのバス』（長新太・作）を読み、先ほどのダンボールで大きなバスを工作。3日目には絵本に登場した「バスから降りてくる様々なもの」をチームで協力して身体で表現し、加えてオリジナルで考えた降りてくるものも作って、発表しました。



コロナ禍でのWS振り返り 進行役：大道朋奈

今年はコロナ禍で例年よりもWSの時間が短く設定されていたため、子どもたちが物語の世界に飛び込みやすいようにと、絵本を用いた活動にしました。絵本は子どもたちを創造の世界へ誘うツールになります。1冊目に扱った『かあかあもうもう』は、立ち位置を固定して演じてても劇が成立するので距離を保ちやすいお話です。2冊目の『ムニャムニャゆきのバス』では、距離を取る仕組みとしてダンボールを連ねたバスを工作しました。1人1箱で各自の指定席を作り、前後に空席を設けることで乗り降りも楽しい大型のバスに。周りの人との距離を取る目安として、「両手を広げてTの字になる」というのは3日間を通してやっていましたが、近づいてしまってから注意するのではなく、「Tの字になったまま○人組で集まって」というように、あらかじめ近づかないよう指示することに気をつけていました。



中学年Gコース

進行役：有吉宣人 アシスタント：植松愛、とみやまあゆみ

日程：2020年8月3日（月）～5日（水）10：30～12：00 対象：小学3・4年生 参加者：9名

絵本『シルクハットぞくはよなかのいちじにやってくる』（おくはらゆめ・作）をベースに、子どもたちオリジナルの「〇〇（帽子）ぞく」を考えて、劇で使う自分たちの帽子をグループごとに工作しました。夜中、寝ている人にどんな「こっそり」をするのか身体を動かして考えたのち、劇に登場する寝ている人をみんなで作成。最終日の発表では、部屋の掃除をしてくれたり、なくしものを見つけてくれたり、料理を作ってくれたり、子どもたちの優しい「こっそり」がつまった素敵な劇が完成しました。

コロナ禍でのWS振り返り

進行役：有吉宣人

コロナ禍でWSのプランを立てる際、以下の3点を解決するやり方を考えることにしました。

①実施時間が例年より短い ②呼吸を荒げる状態を極力作らない ③参加者同士の距離を取る

まず①を踏まえて、絵本をベースに演劇を作ろうと考えました。絵本は参加者が物語の世界に没入するきっかけとなりやすく、その速度もスピーディです。また、絵本を選ぶ際は、②を踏まえました。この絵本は「夜中にこっそり」する場面設定なので、大きな声は出さず、呼吸も落ち着いた創作になります。最後に③を踏まえて工作を行いました。工作は互いに距離を取れる個人作業です。オリジナルの衣装を作るので、自分たちの演劇への当事者意識や愛着も増します。そして、共演者（寝ている人の役）もみんなで作ることで、劇中でも相手役に近づく工夫をしました。



中学年Hコース

進行役：大道朋奈 アシスタント：柏木陽、櫻井晋

日程：2020年8月11日（火）～13日（木）10：30～12：00 対象：小学3・4年生 参加者：9名

絵本『ゴムあたまポンたろう』（長新太・作）を読み、ポンたろうが旅をするオリジナルの劇を作りました。1日目は、参加者の「今まで行ったなかでいちばん楽しかった場所」を共有し、2日目は、チーム対抗の「新聞紙丸め競争」を行なった後で、絵本を読みました。丸めた新聞紙をポリ袋に詰めてチームごとに顔のパーツを作って貼り付け、大きな「ゴムあたまポンたろう」の顔が完成。3日目は、ポンたろうがどこへ行ってそこからどうやって飛んでいくのかを考えて劇にしました。

コロナ禍でのWS振り返り

進行役：大道朋奈

絵本『ゴムあたまポンたろう』は頭がゴムでできていて、いろいろな所に頭をぶつけて飛んでいく少年ポンたろうのお話です。旅への想像を膨らませることができ、実際に遠出をするのが難しい今年の夏休みですが、旅への想像を膨らませることができるので、ぴったりのお話だと思いました。距離を保つための工夫として考えついたのは、1メートルほどの棒で操る共演者「ポンたろう人形」の工作です。ポンたろう人形はチームごとに1体、作成しました。右目・左目・眉毛・口・鼻とパーツごとに各自分担して工作し、個人作業を行ないつつも全員で協力して完成させることで、チームとしてポンたろうへの愛着が湧いていたようです。

お話を創作する前段階では、身体でものの形を表現する活動を多く行ないました。コロナ以前は、複数人で1つのものの形を作ることをよくやっていましたが、今回は提示のバリエーションを増やし、1人でものの形を作りました。たとえば「バットとボール」のように2つでセットのものを提示し、2人1組で瞬時にどちらかがどちらかの形になる、「公園にあるものといえど？」というお題で各々が思いつくものを作るなどです。個々に表現しつつ全体として1つのまとまりを形作ることに取り組みました。



中学年Iコース

進行役：すずきこーた アシスタント：矢部久美子、ようよう

日程：2020年8月17日（月）～19日（水）10：30～12：00 対象：小学3・4年生 参加者：10名

俳句から演劇を作る活動に取り組みました。

1日目と2日目の前半は、ものの形やいろいろな場所・状況を協力して身体で表現しました。

その後グループになって、小林一茶や松尾芭蕉などの有名な句を、身体を使った静止画で表わしたり、10秒の短い劇にしたりして見合いました。3日目は、夏をテーマに自分たちで作った俳句を劇にしました。

できあがった演劇は、新型コロナウイルスの影響で特別な夏休みを過ごしていることへの思い、自分たちが日々抱えている気持ちが表現されるものとなりました。



コロナ禍でのWS振り返り

進行役：すずきこーた

基本的に意識していたのは低学年Cコースと同じですが、WSの最終日が8月19日（は・い・く）の日だったので、俳句を取り入れました。休校を余儀なくされ、例年とは違う夏休みを過ごす子どもたちに思いを言葉にしてもらうには、難しすぎても楽しくないので、字数の短いフレームの俳句が適切だとも思いました。俳句は、落ちついて内面を見つめることができるよう、家で書いてきてもらいました。子どもたちが持ち寄った俳句は、今の状況や去年の思い出、今やりたいことなど、子どもたちのもやもやが言葉になっていました。プランニング中は考えていませんでしたが、子どもたちの様子を見て、「他の人に伝えることで気持ちが前向きになれる」「悩んだりもややしているのは自分だけではないと感じられる」というような効果もあったのではないかと思います。こうしたことも必要なことだったと思います。子どもたちの声を聞き、今しか表現できない演劇を子どもたちと作ることができたWSでした。



中学年Jコース

進行役：田崎葵 アシスタント：柏木陽、ケンノスキー

日程：2020年8月21日（金）～23日（日）10：30～12：00 対象：小学3・4年生 参加者：9名

「演劇＝Play＝遊ぶ」を出発点に、身体をたくさん動かして遊ぶところから始まりました。

1日目の終わりに、声を出さずパントマイムで人に伝えることを試みたのち、

2日目は絵本『シルクハットぞくはよなかのいちじにやってくる』（おくはらゆめ・作）を読み、絵本のお話の通り、寝ている人の布団をこっそりとかけ直してあげる練習をしました。

その後、シルクハットを工作して自分たちの衣装が完成。3日目は劇のオープニングダンスをみんなで考え、グループでこっそり布団をかけ直した後に、もう一つ何か善いことをする劇を作って発表しました。

コロナ禍でのWS振り返り

進行役：田崎 葵

集まった子どもたちが身体的接触をせず、距離を取って、安全に演劇を作るためには、どうしたらいいだろうか？と考え、寝ている人の布団をこっそりとかけ直してあげる「シルクハットぞく」が出てくる絵本『シルクハットぞくはよなかのいちじにやってくる』を元にしたプログラムを組み立てました。

こっそり何かをするためには、まず静かに動くこと、接触しないこと、そして一緒に演劇を作る同じチームの人と息を合わせることが必要です。子どもたちがWSで接触をしないことをいわば強制されている状況の中で、非接触の状態を「気づかれずにこっそり善いことをするために必要なこと」と捉えてもらい、コロナによって人と離れなくてはいけないという感覚ではなく、演劇作りを楽しむスパイスとして使うことができる工夫をしました。



高学年Kコース

進行役：田崎葵 アシスタント：とみやまあゆみ、ナントモ

日程：2020年8月7日（金）～9日（日）14：30～16：00 対象：小学5・6年生 参加者：10名

「生きてるってどこから？」をテーマに、3日間を通して無機物と触れ合うことに取り組みました。

1日目は、丸めた新聞紙を『ももたろう』の鬼に見立て、鬼と仲良くなる方法を考えて劇にしました。

2日目は、布や紐などの素材を使い、この世に1つだけの自分の「相棒」を作りました。

3日目は、その「相棒」の自己紹介を考えて発表。次に2人組になり、「相棒」を含めた4人で旅行をする演劇を作りました。

始めはただの「モノ」でしたが、それがどんな性格かを考え、劇にしていくなかに、だんだんと「相棒」としての愛着が湧いてきた様子でした。



コロナ禍でのWS振り返り

進行役：田崎 葵

子ども同士が触れ合うことができない状況のため、触れることのできる対象として、モノを取り扱うことにしました。作品に出てくる共演者を工作で作れば、コロナ禍でも誰かを感じ、触れ合いながら演劇を作っていくことができるのではないかと考えました。工作をする際は、ハサミは1人1個、一度触れた布やその他の道具はすべて除菌する、一度誰かが触ったものは他の人は触らないことにするなど、様々なルールの中で作っていきました。ほかの活動をする際でも、話し合いに夢中になって近づきすぎてしまうことを避けるため、相談するときは定位置に設置した椅子に座ることにするなど、人と人との距離を保つための対策も行ないました。



高学年Lコース

進行役：青山公美嘉 アシスタント：大塚由祈子、せっきー

日程：2020年8月25日（火）～27日（木）14：30～16：00 対象：小学5・6年生 参加者：9名

雑誌の切り抜きから物語を作って演じる3日間。

まず1日目は、グループで1つのものの形を身体で表現したり、童話のいち場面を作ったりしました。

2日目は、稽古場一面に広げた色とりどりの雑誌の中からピンとくる雑誌を選び、

写真や文字を切り抜いて1枚の画用紙に貼り合わせ、コラージュを作成。

次に2人組になってそれぞれのコラージュを1つにつなぎ合わせ、これを本の表紙として、本のタイトルとあらすじを考えて演じました。子どもたちは雑誌からイメージを膨らませつつ、自分たちの気持ちも表現し、この夏ならではの独創的な劇を創作しました。



コロナ禍でのWS振り返り

進行役：青山公美嘉

距離を保つため、2人組でのシーン作りに挑戦しました。

2人組だと、人間関係が鮮明に見えてきます。1人の男の子は、1回目のシーン作りで男性スタッフと2人組になりました。彼のやりたいことが思う存分反映されたグロテスクとも思えるシーンを作っていました。これはスタッフに対して「受け入れて貰える信頼」があったからかと思います。2回目のシーン作りでは参加者の女の子と2人組に。前回作ったようなシーンは到底受け入れてくれません。しかも女の子は恋愛というアイデアを持ちかけてきました。彼としては恥ずかしいのか、「そっち(あなた)が、こっち(自分)をあれ(好き)ならいいけど、こっち(自分)もあれ(好き)なのは嫌だ」とせめてもの抵抗をし、結果、糸で作った輪っかの電車に、ディスタンスを保ちながら2人で乗ってでかけるデートのシーンができあがりました。

2人組でのシーン作りからは子どもたちの微かな「推し引き」が見えますし、集団だと押し流されてしまいがちな個人の小さな表現もちゃんと見えてくるのも面白いと思いました。子どもたち一人ひとりに任される責任も大きく、緊張もありつつ達成感も大きかったと思います。

中学生のための 演劇ワークショップ

Aコース

進行役：とみやまあゆみ アシスタント：有吉宣人

日程：2020年8月3日(月)～5日(水)、14:30～16:30 対象：中学生 参加者：11名

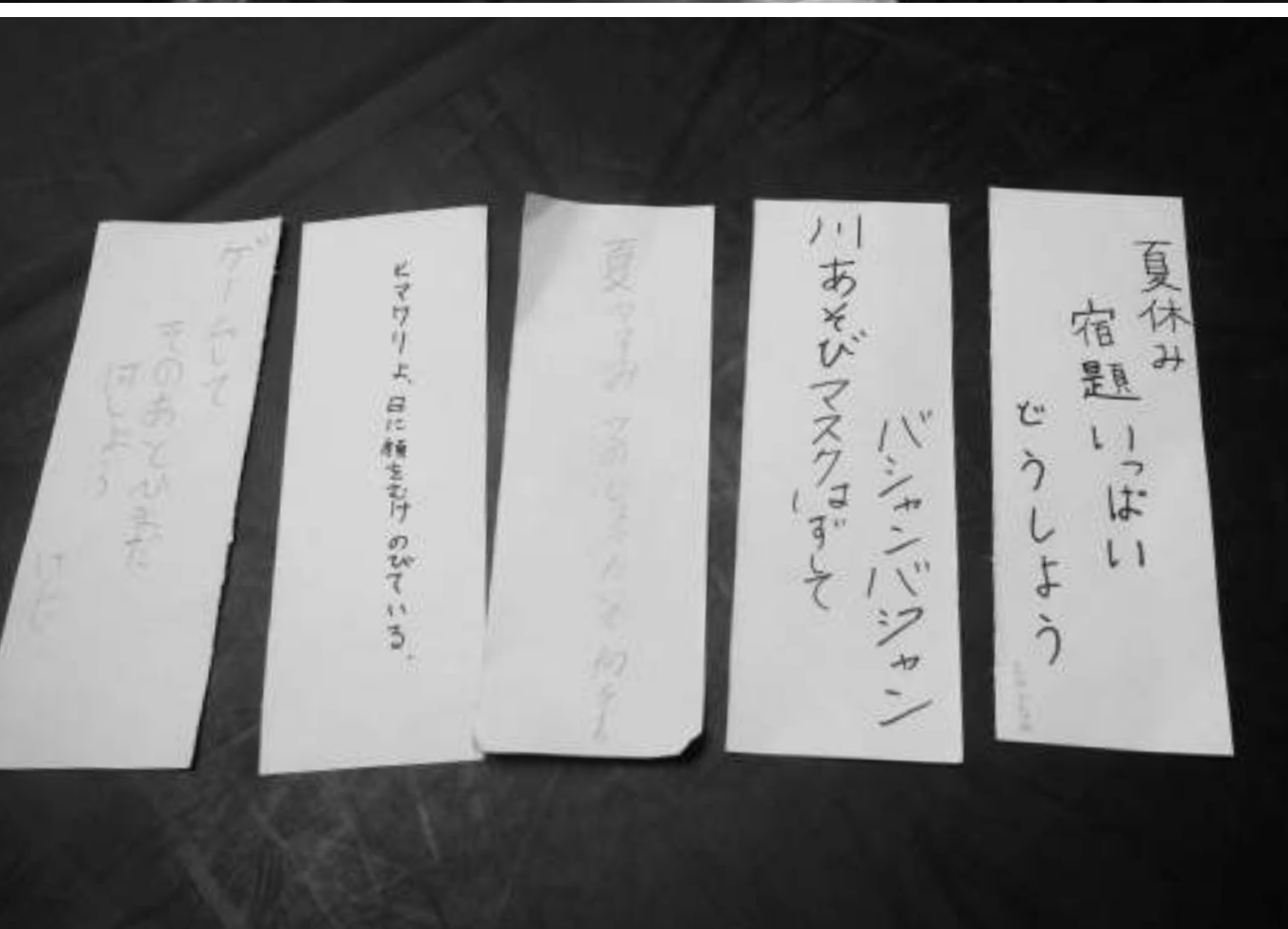
一人ひとりが、日々の生活の中で違和感を覚えたり、
もやもやを感じていたりする出来事や人について、
みんなで共有して劇を作りました。自分や友人の悪口を言う、授業に真面目に取り組まない、
といった同級生の態度に対する「もやもや」が多く出されました。
途中、大きな声を出して「もやもやに対してひとこと言う」ゲームも交えつつ、
「もやもや」の再現や討論番組ふうの演劇を相談しながら作りあげました。
自分の気持ちを表現したり、人の気持ちに触れたりすることで、その多様さを知り、
自分自身について理解を深めるきっかけとなった様子でした。

コロナ禍でのWS振り返り

進行役：とみやまあゆみ

今回のWSは従来と大きく違う点がいくつかありました。実施時間が6時間×3日間から2時間×3日間へと短縮、マスクを着けての実施、人と人との距離を互いに両手を開いたくらいあけて接触はしない、などです。これまでのWSでは、物理的に「触れ合う」こともプロセスの一部として位置づけており、またチームの中だけで相談し合うというのも重要な展開の一つだったので、それらを人との距離をとりながらどう取り入れることができるのかを検討しました。

まず、チームでの相談の時間は椅子に座り、距離を保って行なうようにしました。しかしそうするとなかなか話しづらく、またマスクを着けた状態で誰かと話をすること自体に慣れていないように感じたので、相談の内容が周りに聞こえることが気にならないように稽古場に音楽を小さく流しておく、手の空いているスタッフ同士で同じ内容の相談を大きな声(普通の会話レベルの音量で十分効果あり)で行なうなどの工夫をし、声の出しやすい状況を作るようにしました。



Bコース

進行役：金谷奈緒 アシスタント：有吉宣人

日程：2020年8月11日(火)～13日(木) 14:30～16:30 対象：中学生 参加者：9名

1日目は、本から無作為に言葉を選んで、1人ずつ言葉からポーズを作り、それらをつなげてダンスを作りました。ポーズとポーズをつなぐ動きや雰囲気も、擬音語・擬態語辞典や感情語辞典の言葉から考えて、最終的に曲に合わせて踊りました。2日目は、3本の戯曲『醜の母』（長谷川伸・著）『お気に召すまま』『ロミオとジュリエット』（ともにシェイクスピア著）の「人と人の距離のある場面」を取り上げ、みんなで全場面読んだあと、2人組になって気に入った戯曲の場面を演じました。3日目は選んだ戯曲の場面を自分たちで現代語に訳して新たに劇を作り、言葉や関係性の変化などを楽しみました。

コロナ禍でのWS振り返り

進行役：金谷奈緒

「1人(または少人数)のできる作業を増やす」ことを念頭に進行案を考えました。最初は「朗読」(言葉を読むこと)をベースにしようと考えていたのですが、どうしても身体を動かしたい欲が抑えられず、結果、私がこの機会にやってみたいことを詰め込んでみるかたちになりました。

身体を動かすワークは、私が事前に試してみて、なるべく運動強度を自身でコントロールできるワークをやりました。言葉を読むことに関しては、自粛期間で演劇的なものに飢えた子たちが集まるのではないかと思います、せっかくの機会なので戯曲をやることにしました。戯曲をやるにしても、朗読的な表現を想定していたのですが、戯曲を手にしたらきっと動いてしゃべってみたいくなるだろうと思い、「距離を取る」ことにできるだけ違和感が出ないようにしたいと考え、「距離があることが普通」な戯曲のシーンを使うことにしました。



Cコース

進行役：有吉宣人 アシスタント：柏木陽

日程：2020年8月25日(火)～27日(木) 14:30～16:30 対象：中学生 参加者：10名

「秘密を人と共有する」をテーマにしました。

1日目は、「ふだん、少しめんどうだと思っていること」をお題にして川柳を読み、その状況を演劇にしました。2日目は、演劇にすると面白くなりそうな「秘密を共有する状況」を考え、3日目はそれを劇にしました。かっぱやお化けを友だちと目撃してしまうけれど、それを秘密にするという劇や、告白現場を目撃してしまった人々が口をつぐむといった劇が完成しました。また3日間にわたって毎日「ボホチ」という、言葉をやりとりするゲームを行ないました。ゲームの精度は回を重ねるごとに上がり、参加者の集中力は日々高まっていきました。

コロナ禍でのWS振り返り

進行役：有吉宣人

コロナ禍であるということを踏まえて、以下のことがポイントになりました。

- ①呼吸の落ち着いた状態での創作
- ②グループワークの人数を最大3名とする
- ③3日間同じシアターゲームを行なう

①では、まずテーマを「秘密を人と共有する」と決めました。緊張感が生まれる場面となるからです。創作をする上で、大きな声や台詞で説明をするのではなく、身振りや「間」で緊張感を生み出すことができることを参加者たちと共有しました。また、②グループワークの人数を絞ることで、より参加者同士の距離を取りやすい状況を作りました。そして、③以前より短い開催時間であることを踏まえ、期間中、毎日同じシアターゲームを行ないました。短い時間ながら「みんなと行なういつものあの活動」という感情を生むことに大きく関与しました。



高校生のための 演劇ワークショップ

Aコース

進行役：花崎 攝 アシスタント：田崎 葵 日程：2020年8月17日(月)～19日(水) 14:30～16:30

対象：高校生もしくは2002年4月2日～2005年4月1日生まれの人 参加者：4名

テーマは「空想交換日記」。参加者はまず自分が担当する架空のキャラクターを決め、そのキャラクターになりきってほかの参加者が設定したキャラクターと交換日記を行ないました。参加者が設定したキャラクターは、手持ち扇風機、クローゼットのハンガー、宇宙人、元人魚のOLなど多彩なものに。非現実な設定の中にも、参加者自身の個性やふだんの思考、それぞれの関係性などが反映された交換日記が生まれました。最終日はキャラクターのプロフィールや交換日記を元に、登場人物全員が勢ぞろいする物語を創作し、一つの演劇が生まれました。

コロナ禍でのWS振り返り

進行役：花崎 攝

劇場は、特に稽古場は、ある意味「治外法権」を有します。誰がなんと言おうと、常識がどうであれ、自由に表現できる(ただし、無法地帯ではない)場所です。「空想交換日記」は、2020年(1月～8月)に書かれたという設定以外なんの条件もなく、自分の発想したキャラクターの日記に次の書き手への質問を添えるかたちで始まりました。現われた荒唐無稽なキャラクターたち!? 高校生たちは自分の発想したキャラクターを膨らませながら、仲間の発想を受け入れ、最終的に全員が登場する物語を構成し演じ切るというフルコースを超特急でやってのけ、「楽しかった!」と名残惜しそうに帰っていききました。個人作業の時間を設けて接触時間を減らす意図や、日記を通じてコロナ禍の高校生たちの思いを表現してもらおうといった大人の思惑を超えて、演劇の楽しさを味わい、仲間を獲得し、制約だらけ不安だらけの厳しい現実の下にあって、ひととき自らをのびのびとエンカレッジしていった彼女たちにエールを送ります。



Bコース

進行役：柏木 陽 アシスタント：傳田うに 日程：2020年8月21日(金)～23日(日) 14:30～16:30

対象：高校生もしくは2002年4月2日～2005年4月1日生まれの人 参加者：6名

古くから演劇で描かれる「対立」や「葛藤」について考えてみた3日間。ふだん感じている「本当はやりたけれど、今はやれていないこと」についての想いが出発点となりました。「アルバイトがしたい」「俳優になりたいという夢を人に話せない」「憧れる人間像に近づけない」などの気持ちを元に、短いテキストを書いて、演劇を作りました。参加者がそれぞれ日常の中にある「対立」や「葛藤」を探り、自分自身について距離を取って見てみる時間となりました。

コロナ禍でのWS振り返り

進行役：柏木 陽

高校生はいろいろなことができる年齢ですが、コロナ禍という状況の中でいちばんやりたいと思ったのは、1人で考えて作ることに集中してみるということでした。普通に暮らしている中では、自分が抱えている「葛藤」はあまり見えないものです。意識しすぎると、ふだんの生活を送るのが辛くなることもあるからだろうと思います。

そこで、今回は小さくてもゆっくりでも構わないから、自分の「葛藤」をみつめ、なんらかの形にして他の人に見せて反応をもらい、また他の人の「葛藤」の表現に触れて、自分の中のもやもやを形にしていこうと試みました。高校生たちは、他の人に手伝ってもらいながら自分の事情を形にしていきました。自分一人では、ないことにしてしまうような想いや、こんなときだからこそ聞いてほしいことに向き合いつつ、自分が密やかに心の中で考えてきたことをどのようにすれば表現できるか悩みながら、ゆっくりと作っていききました。



コロナ渦でおすすめの シアターゲーム!

1 たるえだ

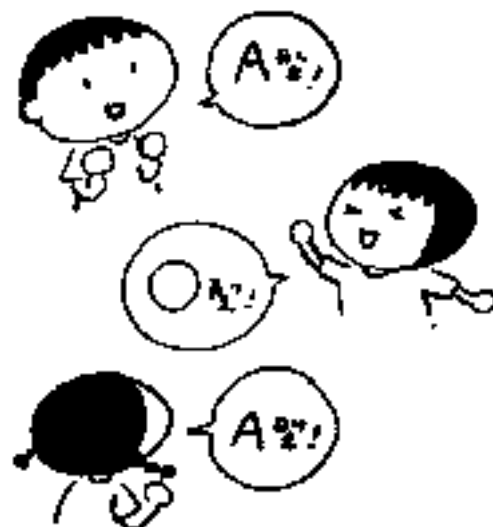
- 1 全員、進行役がいるほうを向いて、その場で駆け足をしします。
- 2 進行役の「たるがきた!」の声でジャンプをします。
ゴロゴロと転がってくる樽をジャンプで避けるイメージ
- 3 「枝がきた!」の声でしゃがみます。
枝が頭上を通るので、しゃがんで避けるイメージ
- 4 子どもたちから、「次に何が来るか」「来たらどうするか」のアイデアを出してもらい、実際にやってみます。
例:「雷」が来たら、「おへそを隠す」



2 共通点探し

- 1 2人1組になります。
2人で話し合って自分たちの共通点を探します。
「服を着ている」「人間」といったわかりやすいものはナシ
- 2 見つけた共通点を発表したら、ペアを変えてまた共通点を探します。
すでに発表の中で挙がった共通点はナシ
- 3 3人1組、5人1組……と人数を増やします。
選択肢が減るなかで、みんなで共通点を探そうと必死になり、自然にコミュニケーションが生まれます。

* 共通点を相談するときに密になりやすいので、相談する際に立つ「相談スポット」にシールを貼って、決めておくとい

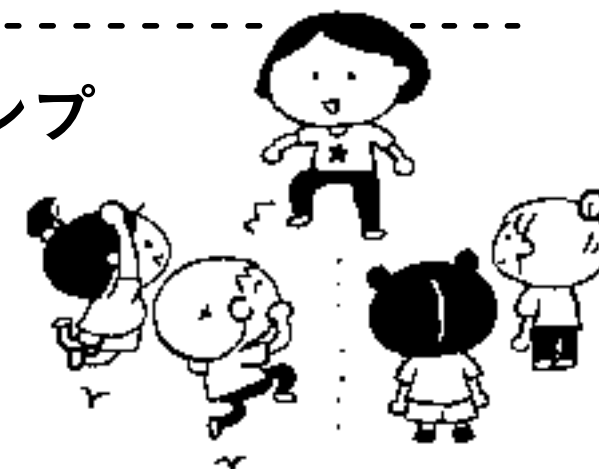


世田谷パブリックシアターのWSでは、さまざまなシアターゲームを行なっています。ここではコロナ禍でもやりやすい非接触型のシアターゲームの選りすぐりをご紹介します!

イラスト: 和田みさき

3 みんなでジャンプ

- 1 進行役が足でどん! と床を踏んだら、みんなでジャンプをします。
みんなのジャンプがびったりそろうように声をかけます。
- 2 全員を2つのグループに分けます。
進行役から見て右側にいるグループは進行役が右足で踏んだらジャンプ、左側にいるグループは進行役が左足で踏んだらジャンプ、両足で踏んだら両グループともジャンプします。
息を揃えてジャンプができるようになると、全体に一体感が生まれます



縄文時代
六本木ヒルズで
シンデレラが...

4 いっだれがどこでなにをした

- 1 全体をいくつかのグループにわけ、グループごとに1列になります。
- 2 グループの先頭の人から「①いつ」「②どこで」「③誰が」「④なにを」「⑤どうした」を、お互い相談せずに考えます。
1人1項目考える。1グループに5人いない場合は「①いつ」「③誰が」「⑤どうした」の3つにするなど調整。
- 3 考えたものを発表します。
めっちゃくちゃな文章ができあがりますが、OKです。他のグループは発表を聞いて感想を伝えます。
- 4 グループの中で順番を変えて繰り返します。
- 5 今度は、1人で紙に①～⑤の項目を考えて書きます。
- 6 もう一度グループを組みます。
グループ内で書いたものを共有し、一人ひとりの文章を表現するストップモーションをグループ全員でつくります。
- 7 できあがった全てのストップモーションを、順番を考えて文章と一緒に発表します。
構成や読み方を考えたり、効果音や動きなどを足したり工夫をする





近日開催予定の主なイベント・ワークショップ

『デイ・イン・ザ・シアター』 1日限りの「演劇&劇場」体験ワークショップ 開催のお知らせ!!

劇場は誰もが訪れることができる、ひらかれた広場です。
でも、なんだか身近に感じにくいし、演劇ワークショップってなんだろうって思いますよね。
演劇ワークショップは人と人が集い、互いに尊重し合うなかで頭と身体を使う場です。
おしゃべりしながらみんなでわいわい過ごしているうちに、
劇場や演劇が今までよりもちょっと身近になる……かもしれません。

密閉、密集、密接回避。
手洗い、換気、距離をとる。
感染予防対策をしながら注意深く行います。

演劇に触れてみたい!という方、暇だからいこうかな!という方、
どんな方でも大歓迎です。演劇経験はいりません。

自分のための120分間。
デイ・イン・ザ・シアターでたまたまの出会いを楽しみましょう!



『デイ・イン・ザ・シアター
～111 っぱ編～』
日程…2021年1月11日(月)
①1月11日(月・祝) 10:30～12:30
②1月11日(月・祝) 15:30～17:30
進行役…すずきこーた(演劇デザインギルド)

『デイ・イン・ザ・シアター
～理想の〇〇編～』
日程…2021年2月18日(木)
(1日2回開催)
進行役…富永圭一(abofa)

『デイ・イン・ザ・シアター
～私の水曜日編～』
日程…2021年3月25日(木)
(1日2回開催)
進行役…青山公美嘉
(NPO法人演劇百貨店)

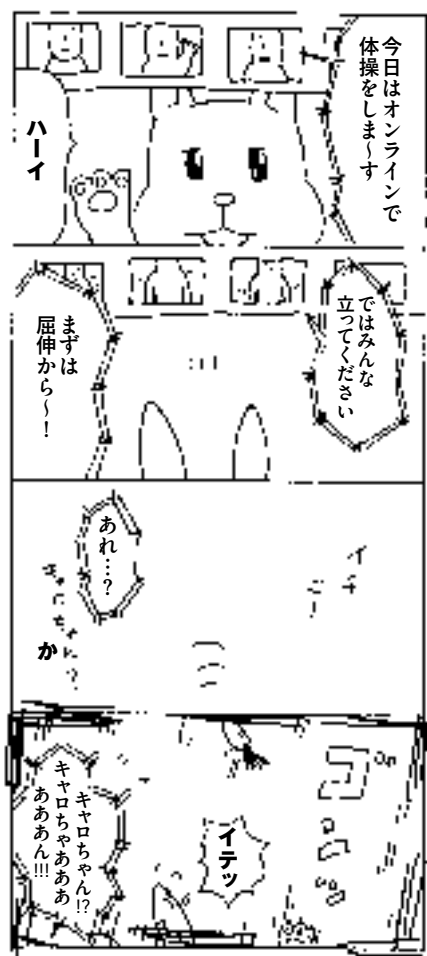
対象…小学生の方:小学生1名と、その保護者1名の2人1組
*小学生のお子さんのみのご参加は不可です。中学生以上の方:中学生以上ならどなたでも
参加費…1回500円 会場…世田谷パブリックシアター稽古場

学芸スタッフから

★10月から学芸に新しく入りました、いしこです!
私は今年の夏、映画館で働いていました。緊急事態宣言が明けて、座席を半分にしての営業。
お客さんの少なさに悲しかったのですが、その中でも、やっと劇場に来られた!と喜んでくれる人も。
私も劇場を待ち望んでいたひとりでした。安心して作品の感想を語り合える日が、また来る
といいなあと願っています。[いしこ]

★今年は新型コロナの夏でしたが、『鬼滅の刃』の夏でもありました。ワークショップに来てくれた子どもたちも夢中で、ポーズをとって
みせてくれたり、キャラクターについてお話しして盛り上がったりしました。参加者とは親子
ほどの年齢差がありますが、共通の話題のおかげで、心の距離がぐぐっと近づいた気がします。
[くたに]

たまにはこんな役 #17



編集後記

今年の夏、コロナ禍で実施された「子どもワークショップ」を特集した本号、いかがでしたか。
前号に引き続き、座談会にお集まりいただいたのは世田谷パブリックシアターお馴染みの進行役の方々です。コロナ禍でどのようにワークショップ(以下、WS)を進行されたのか、お話を伺っています。詳しくはぜひ誌面をお読みいただきたいのですが、感染症予防における対策「ディスタンス」を気にしながらWSをやること、しかもディスタンスを取りにくい子どもたちとWSをやることは、経験豊富な進行役の方々でも悩ましく、試行錯誤の連続だったようです。その場で同じ空気を吸いながら身体を使って表現をし、それをお互いに見せ合いながらみんなで考える演劇WSは、触れ合うことが大切なプロセスとして組み込まれているからです。
とはいえコロナ禍という困難な状況にあっても、進行役が仕掛ける演劇WSの魔法は健在だったようです。その魔法とは、舞台を転換する眼差しです。この眼差しによって、ディスタンスという「制約」は、物語の世界感を生み出すための豊かな「エッセンス」になり、行きたいところに行くことができない子どもたちの日常のフラストレーションは、創作を広げるイメージーションの源になりました。本号でご紹介した進行役の方々の視点や発見、あるいは戸惑いや問い掛けが、コロナ禍でのみなさまの生活の中で活きることがあれば嬉しいです。[かおるこ]

[キャロマガ] Vol.17 / Dec.2020

発行日
2020年12月20日

発行
公益財団法人せたがや文化財団
世田谷パブリックシアター
〒154-0004
東京都世田谷区太子堂4-1-1
Tel. 03-5432-1526
https://setagaya-pt.jp

編集
大谷薫子(本のモ・クシュラ株式会社)

企画
恵志美奈子、九谷倫恵子、
塩原由香里、石川恵理
(以上、世田谷パブリックシアター学芸)

デザイン
和田みさき

デザインコンセプト・マンガ
株式会社ウチカワデザイン

印刷・製本
株式会社リヒトプランニング

後援
世田谷区

世田谷パブリックシアターとは

世田谷区がつくり、(公財) せたがや文化財団が運営している、演劇やダンスのための専門劇場です。三軒茶屋のキャロットタワーの中に、世田谷パブリックシアター (約600席)、シアタートラム (約200席) の2つの劇場と稽古場、作業場などを擁し、ワークショップやレクチャーなどの参加体験型事業にも力を入れています。



世田谷パブリックシアター (主劇場)



シアタートラム (小劇場)

世田谷パブリックシアターへのアクセス



お問い合わせ 世田谷パブリックシアター

〒154-0004 東京都世田谷区太子堂4-1-1 キャロットタワー 5階
 Tel.03-5432-1526 (代表) Fax.03-5432-1559
<https://setagaya-pt.jp>

世田谷パブリックシアターは、東京都世田谷区太子堂の三軒茶屋駅にある26階建ての高層ビル、キャロットタワーのなかにあります。東急田園都市線、東急世田谷線三軒茶屋駅と直結しています。